

Title	日本語とベンガル語の待遇表現に関する対照研究 : 対称詞と他称詞を中心に
Author(s)	Md., Monir Uddin
Citation	大阪大学, 2008, 博士論文
Version Type	
URL	https://hdl.handle.net/11094/49210
rights	
Note	著者からインターネット公開の許諾が得られていないため、論文の要旨のみを公開しています。全文のご利用をご希望の場合は、 〈a href="https://www.library.osaka-u.ac.jp/thesis/#closed"〉 大阪大学の博士論文について 〈/a〉 をご参照ください。

Osaka University Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

Osaka University

氏名	エムディ モニル ウッディン MD. MONIR UDDIN
博士の専攻分野の名称	博士（日本語・日本文化）
学位記番号	第 22306 号
学位授与年月日	平成 20 年 3 月 25 日
学位授与の要件	学位規則第 4 条第 1 項該当 言語社会研究科言語社会専攻
学位論文名	日本語とベンガル語の待遇表現に関する対照研究：対称詞と他称詞を中心に
論文審査委員	(主査) 教授 高階 美行 (副査) 大阪外国語大学名誉教授 溝上 富夫 教授 仁田 義雄 教授 鈴木 睦 教授 高橋 明

論文内容の要旨

本研究は、日本語とベンガル語において待遇表現の観点から対称詞と他称詞に焦点を絞り、調査分析を行う対照研究である。

人を指し示す語としては、固有名詞、親族名称、職階名称、敬称、人称代名詞等がある。鈴木（1973）は、人を指し示すこれらの語類の総称を、自称詞、対称詞、他称詞と呼んでいる。つまり、話し手が自分に対して使う語は自称詞、聞き手に対して使う語は対称詞、話題の人物に対して使う語は他称詞である。本研究は、両言語における自称詞、対称詞、他称詞のうち、対称詞と他称詞の対照分析を目的としている。

対称詞と他称詞は待遇表現として重要な機能を担っており、特定の言語社会における対称詞と他称詞の使用の理解には、社会文化的知識が不可欠である。そのため、対称詞と他称詞は言語人類学、社会言語学、外国語教育学等の分野を中心に多くの関心を集めている。日本語においても、これを契機に対称詞という概念に基づく研究が進みつつある。また、ベンガル語においても、同様の研究（Das 1969; Sultana 1988）がある。

日本語と他の外国語との間には、特に対称詞に関する多数の対照研究が存在する。しかしながら、対称詞と他称詞に関する日本語・ベンガル語間の対照研究は端緒についたばかりであり、両言語の社会文化の理解及び外国語としての日本語教育とベンガル語教育の発展のためには、詳細な分析が不可欠である。

社会組織の基本は家族であるため、一般社会の理解にはまず家族組織を理解する必要がある。対称詞と他称詞に関しても同様であり、家族内における使用状況を解明する手続きを欠くことができない。ゆえに本研究では、対称詞及び他称詞の対照分析の手順として親族間における分析から着手する。対称詞については非親族に対する分析も行うが、他称詞については長期の調査を必要とするため、親族間における分析に限定する。対称詞と他称詞の親族に対する使用を血縁関係、夫婦関係、義理関係に分けて分析する。また、対称詞の非親族に対する使用は、個人関係、職場関係、未知の対話者関係に分けて分析する。

研究方法としては、二段階を設定する。第一段階では、可能な限り多様な場面のデータを収集し、第二段階では、収集したデータの精緻な対照分析を試みる。第一段階のデータ収集のため、小説、テレビドラマの脚本、シナリオ集を扱う。小説、テレビドラマの脚本、シナリオ集は、自然な用例ではないが、作家が客観的に実社会を描こうとする

ので、使用されている自然な用例に極めて近い。この方法では、個人の言語行動が作家の描写やドラマの進行により、よく分析することができる。小説の作者やドラマの脚本家は、対話者の内省、および、心的態度までも説明することが多いため、話者が内省により待遇表現を動的にどのように変化させるかも追跡調査することができる。用例を収集する方法としては、4つの収集様式を作成する。この様式を使用して収集したデータはベンガル語の場合、対称詞約 500、他称詞約 350、日本語の場合、対称詞約 350、他称詞約 200 である。

第二段階のデータ分析においては、第一に、全ての用例データごとに様式をまとめ、各様式のデータを対話者関係に細かく分類し、整理する。例えば、親子関係の中で息子・父親という対話者関係は「息子・父親関係」という最下位の分類となる。分析の手順としては、ベンガル語と日本語の順で使用実態や用例を取り上げながら、両言語の対称詞・他称詞の対照分析を行う。

このような枠組みで対照分析の成果は次のとおりである。

まず、対称詞分析の成果である。親族内の血縁関係において両言語とも年上に対しては、親族名称が使用される。ベンガル語では年上に対して二人称尊敬代名詞 **apni** ないし非尊敬代名詞 **tumi** が使用され、年下には非尊敬代名詞 **tumi** ないし **tui** が使用される。厳密に表現すれば、ベンガル語の典型的な使用は、年上に対しては **tumi**、年下に対しては **tui** である。一方、日本語では年上に対して人称代名詞ではなく親族名称のみが使用され、年下に対しては人称代名詞（あなた、おまえ等）が使用される。すなわち、ベンガル語では二人称尊敬代名詞 **apni** と非尊敬代名詞 **tumi** が年上に対して使用される反面、日本語では年上に対して代名詞は使用せず親族名称のみが用いられる。これが両言語間の最大の相違である。つまり、日本語では年齢の上下関係における対称詞の非対称的な使用のみであるが、ベンガル語では非対称的使用が一般的であると同時に、代名詞に限られるとはいえ、対称的使用 (**tumi** ⇔ **tumi**) も珍しくはない。

夫婦関係においては、一般的にベンガル語の夫婦関係は対称的であるが、日本語の夫婦関係は非対称的である。また、ベンガル語では、代名詞使用の非対称的な現象もみられる。

義理関係においては、両言語とも、年上に対しては対応する親族名称が使用される。ベンガル語では年上に対して尊敬代名詞 **apni** ないし非尊敬代名詞の **tumi** が使用され、年下には非尊敬代名詞 **tumi** ないし **tui** が使用される。しかし、義理関係における一番典型的な使用 (**apni** ⇔ **tumi**) は敬意の現れ方の違いに起因する。つまり、血縁関係の典型的な使用とは大きく異なり、年上に対して尊敬代名詞 **apni**、年下に対して非尊敬代名詞 **tumi** を使用する。一方、日本語でも年下に対しては丁寧な代名詞「あなた」が使用される等、血縁関係の場合（「おまえ/きみ」）とは異なる例もある。

非親族の個人関係においては、同級生及び親しい友人が相互に非尊敬の対称詞を使用する点で両言語は共通している。つまり、同級生の関係は一般に対等関係（非尊敬）である。また、性別により、対称詞の使用が変化するという点においても両言語は共通している。しかし、日本語では見つからない現象であるが、ベンガル語では丁寧な対称詞の揶揄的な使用も見られる。

恋人関係については、ベンガル語では固有名詞及び代名詞の使用において、恋人は相互に名と非尊敬代名詞 **tumi** を使用する。これはベンガル語の対称詞の使用の一番典型的な対等関係（非尊敬）である。一方、日本語では固有名詞の使用において恋人関係は対等関係であると位置づけられるが、代名詞の使用においては、女性が「あなた」、男性が「おまえ」を一般に使用するので、非対称関係である。

個人関係における年齢差を軸にした待遇法の結果、ベンガル語では、年上に対しては尊敬代名詞 **apni** の使用が圧倒的に多く、年上の親族名称の使用がそれに次ぐ。一方、日本語では収集したデータでは親族名称の使用はみられず、敬称、職業・職階名称+敬称（さん）、固有名詞+「さん」のような尊敬の名詞類が一般に使用される。ベンガル語では、聞き手が年上であっても社会的な地位が下の場合、非尊敬の対称詞を用いる傾向が見られるが、日本語では今回のデータでは、社会的な地位の反映は伺えない。代名詞の切り替えについては、両言語とも怒りの感情に起因している。同年輩の場合も一般に尊敬の対称詞を使用する点で、両言語は共通している。ベンガル語は一般に尊敬代名詞 **apni** が、日本語は固有名詞+敬称、敬称が使用されている。しかし、ベンガル語では怒りの感情で尊敬代名詞 **apni** → **tumi**、**tumi** → **tui** への切り替えもみられる。

年下の場合、ベンガル語では非尊敬の対称詞（名及び非尊敬代名詞 *tumi*）が使用されるが、日本語では代名詞のみの例が多い。しかし、ベンガル語では年下に対して年上の親族名称の使用も見られ、この点、日本語とベンガル語は大きく異なる。

職場関係においては、職階名称は、ベンガル語では上司に対する敬称としては使用されないが、日本語では、上司に対する唯一の敬称である。ベンガル語では、上司に対する単独の敬称のみ（*sar/madam/saheb*）の使用が特徴的であり、上司に対して格式を重んじる社会を反映している。日本語では、このような単独の敬称の使用は見られない（「先生」を除く）。ベンガル語の同僚関係は、一般に尊敬の対称的關係で、日本語の同僚関係は非尊敬の対称的關係であり、好対照となっている。日本語及びベンガル語における教員・生徒関係は、非対称的關係が多い。しかし、日本語では教員に対して職階名称「教授」が敬称として使用されていること、ベンガル語では教員に対して親族名称が使用されていることが大きな相違点である。

未知の対話者関係においては、両言語の典型的な現象は、「未知の対話者関係」が一般的に改まった場面であると理解され、対話者は相互に尊敬の対称詞を使用する。ベンガル語では尊敬代名詞 *apni* の相互的な使用、日本語では代名詞以外の語類の尊敬の形式の相互的な使用が観察される。代名詞の切り替えは、両言語において見られるが、切り替えの要因は異なる。代名詞の切り替えで抵抗や依頼のような表現するのは、ベンガル語においてのみ見られる。親族名称の使用については、両言語において親族名称の虚構的使用が見られるが、大きな相違点も観察される。年上に対して年上の親族名称を擬似的に使用する点では共通しているが、子供の視点からのテクノニミー（*teknonymy*）の使用は日本語のみに見られ、年下に対して *baba*「お父さん」、*ma*「お母さん」の親族名称の使用はベンガル語のみに観察される。

ベンガル語では、「一時的関係にない聞き手」及び「一時的関係にある聞き手」の両者に対しても敬称（*sar, madam, saheb* 等）が使用されるが、日本語では「一時的関係にある聞き手」に対してのみ見られる。日本語では、「客」という名詞が「一時的関係にある聞き手」に対しては「お客さん・お客さま」という尊敬形式で使用されるが、ベンガル語では、「客」に対応する語彙（*kreta*）は対称詞として使用されないため、この場合、敬称（*sar/madam*）がよく使用される。

次に、他称詞の分析成果をのべる。

家族内では、両言語において、年上に対して親族名称、年下に対して固有名詞を使用する点が共通している。しかし、ベンガル語では年上に対して三人称代名詞も使用できるが、日本語では使用できない点異なる。また、ベンガル語では年上に対して一般的に尊敬人称代名詞が使用されるため、年上に対する敬語使用の点で、両言語は共通している。

聞き手が家族外である場合、両言語の他称詞の使用は、年齢関係および親疎関係によって異なる。ベンガル語では一般的に年上に対しては、親族名称と尊敬三人称代名詞が使用され、年下に対しては固有名詞、親族名称と非尊敬三人称代名詞が使用される。一方、日本語では、話題の人物の年齢に関係なく、自分の家族について謙譲の親族名称を使用するのが基本的な待遇法である。しかし、聞き手との親疎関係によって、年上の話題の人物について尊敬の親族名称が使用されることもある。

ベンガル語では、聞き手が家族の内か外かに関係なく、他称詞が使用されることを考慮すれば、他称詞の使用は話題の人物により「絶対的」に決まる。一方、日本語では、聞き手が家族の内外のいずれであるかにより他称詞が選択されるため、他称詞は聞き手との関係により「相対的」に決まる。

ベンガル語では、年上に対して、家族内では非尊敬の代名詞を使用しても、家族外では尊敬の三人称代名詞が使用される。つまり、改まった場面で年上の親族に対する敬語使用は尊敬を意味する。一方、日本語では改まった場面では謙譲語の使用が一般的である。つまり、改まった場面ではベンガル語では、年上に尊敬を示す一方、日本語では謙譲表現を使用する。

ベンガル語では、なんらかの感情的原因で、通常使用される直示的三人称代名詞の代わりに、他人扱い（関係の冷却化）の非尊敬・非直示三人称代名詞 *se* が使用される。一方、日本語では同様の場合、「あいつ」が使用される。この意味で、両言語で親族に対して使用される *se* と「あいつ」は同じ機能を持っていると言える。こうした特異な使用

に対する術語はないが、本論では仮に dissociative 「関係遮断的」と名づけておきたい。

本研究で用いた方法での対照分析の成果は以上のとおりであるが、この方法の制約もある。最も大きな制約は、用例がテレビドラマ、小説、シナリオ集から得られたデータである点である。これらのデータでも具体的な対話場面も分析しうが実際の母語話者の言語意識も分析の対象にする必要がある。つまり、本調査で扱った文献からの用例に加えて、自然な会話例、母語話者の言語意識の確認のためにアンケート、面接調査に基づく分析ができていたら、より正確な成果が得られたことであろう。しかし、本研究の対象は広範囲であるため、考えうるあらゆる方法を用いて分析することは不可能である。

今後の研究では現在のデータに加え、自然な会話例の収集、アンケート・面接調査による分析方法を活用し、非親族に対する他称詞の分析を完成すると共に、今回扱うことが出来なかった自称詞の研究に着手したい。しかし、今回の研究対象に限定しても、調査範囲は相当広範囲のものであった。場面や状況を細かく絞り、詳細な分析を行うことにより、ベンガル語や日本語教育への貢献を目指したい。

論文審査の結果の要旨

論文の構成：

上記論文は、研究の目的及び方法論を述べる第1部（序章、1章－3章）、対称詞を扱う第2部（4－7章）、他称詞を扱う第3部（8－9章）、待遇表現のダイナミズムを論じる第4部（10章、終章）の4部構成で、要旨（日本語/英語）・目次・文献リストを除く本文が187頁に及ぶものである。

研究の位置付けと先行研究：

本論文は優れた言語直感を持つベンガル語話者である執筆者が、母語であるベンガル語の待遇表現について、いわゆる敬語をはじめとする多様な待遇表現に富む日本語の研究成果に依拠しつつ、両言語の対照研究を通じて本格的に解明することを目的としている。ベンガル語の信頼しうる記述文法が存在しない状況では、両言語における待遇表現の先行研究は極めて概論的なものしかないのみならず、代名詞や指示詞の文法概念すら執筆者が記述の枠組みを設定する必要があった。この意味で、ベンガル語の主要な先行研究2点を質と量において遥かに凌ぐことは言うまでもなく、日本語とベンガル語の初の本格的対照研究としての評価は揺るがず、研究の位置づけはきわめて明瞭である。また、日本語と他言語との待遇表現に関する研究と比べても、データの量や分析の範囲の面でも遥かに包括的な研究であると言える。

しかしながら、多数の先行研究が存在する日本語待遇表現の研究に依拠すること、および、今日の日本語研究の進展からすると、興味深い論点（後述）の提示をさらに理論的な枠組みとして展開する余地もあったと思われる。さらに、先行研究に言及する論述姿勢についても、性急さが危惧される個所も指摘せざるを得ないし、「狭義」と「広義」の待遇表現の区別と本研究の関係についても執筆者の明示的な記述が望まれるところである。待遇表現として自称詞が割愛されたことについては、日本語ではきわめて多様な表現を持つがゆえに惜しまれるが、ベンガル語においては代名詞の使用しかなく（動詞の語尾にも表れない）、対照研究としては日本語分析に偏りすぎる懸念を考慮すれば、やむをえない判断と言える。

言語データの収集：

とは言え、本研究の大きな特徴の一つは、執筆者が本研究のために収集した言語データの規模である。ベンガル語で収集した事例約850（対称詞と他称詞の合計）と日本語約550（同）は、映画やドラマのシナリオ集（ベンガル語では大半が用例を聞き書き）や小説から独自に収集したものであり、待遇表現の多様な場面の事例（社会階層、年齢、性別、職業、バングラデシュにおける複雑な親族名称体系等）を集める困難を考慮すれば、そのデータはきわめて貴重なものである。

小説・脚本・シナリオ等においては待遇表現が過度に一般化され、表現効果を高めるためにバーチャルな役割語が創出されてしまうこと、また、日常的には普通であっても作品の場面としては描かれにくい場面があること等から、収集されたデータ数やその分布（論文中では詳細な場合分けとデータ数や比率が提示されている）の評価については、慎重さと一定の留保が必要である。また、自然な会話例の収集や面接調査・アンケート調査があれば、今回収集したデータの相対化が図られよう。このような制約があるとはいえ、ベンガル語は言うに及ばず日本語の事例も極めて多大の労力の成果であり、執筆者が収集したデータの公刊は、同様の研究分野への大きな貢献として強く期待される。

対照言語研究としての論述：

本研究の中心部分を占める対称詞と他称詞の対象分析は、親族関係と非親族関係に大別され、それぞれについてさらに詳しく細分した上で、ベンガル語と日本語の双方について収集データの総合的分析と比率が提示されている。これには、三つの意味で大きな意義がある。

第1に、ベンガル語の親族名称が日本語を上回る複雑な体系を有する（兄弟姉妹とそれぞれの配偶者、両親双方の兄弟姉妹とその配偶者等）ことから、執筆者にはデータ収集に多大な負担がかかったが、少なくとも今回の調査で、ベンガル語の待遇表現使用の極めて詳細な実態が初めて記述されたこと、第2に、そのベンガル語の待遇表現と対照する観点から日本語データの収集に取り組んだため、日本人研究者と同等かそれ以上の尖鋭な意識が日本語データの収集に活かされたこと、第3に、詳細な場面分け（例えば、父への言及を家族間、家族外の親密な関係、疎遠な関係に三大別し、それぞれにつき親族名称、テクノミー、代名詞に細分し、しかる後に複数の親族名称と複数の代名詞ごとに調査）による調査は、ベンガル語の既存文法や研究の規模をはるかに超える。記述はあくまで自らが収集したデータの分析に依拠したものであり、良くも悪くも客観的な事実の指摘であるが、ベンガル語研究において、本研究の規模を凌ぐことは容易ではない。

この部分の調査結果は、詳細な論述の後、終章において 27 項目にわたり簡潔にまとめられている。ベンガル語の場合、二人称代名詞に三種類（尊敬、非尊敬年上、非尊敬年下）あること、三人称代名詞は+/-humanで大別され、それぞれ直示（近称/遠称）と非直示に分かれた上で、+humanの場合は尊敬と非尊敬に区別されてきわめて複雑であること、同一人物に対して多数存在する親族名称（固有語、英語起源等）を対話戦略に応じて話者からの呼称ではなく話題の人物から見た呼称への切り替えが頻繁に行われること、テクノミーの使用が日本語よりも広範囲であること等が、実際の対話場面に応じて複雑な用法を生み、ベンガル語社会における待遇表現の使用実態が明らかにされている。

今、ベンガル語を離れて本研究が待遇表現研究一般に示唆する興味深い研究成果に焦点を絞れば、前記のような複雑な代名詞について尊敬/非尊敬、年上/年下、直示/非直示の間で切り替え、複数の親族名称間の切り替え及び話題の人物から見た呼称への切り替え等は、概略、待遇表現の2方向（+/-）への切り替え効果をもたらす。これが対話におけるダイナミックな効果を生み、対話中における感情表現や相手への依頼（ないし説得）等の意図をうまく伝達する（幼い娘にある行動を促すために「お母さん」と呼びかける等）。執筆者が指摘する一例を挙げれば、対話中に不快感や不同意を示すための切り替えを dissociative「関係遮断的」と位置付けている。このような待遇表現のダイナミズムを、対話戦略の視点から再構成し理論化する可能性について、執筆者は指摘のみに留まっているのは惜しまれる。

研究成果の評価：

上記のように、鋭い言語直感と優れた日本語運用能力を駆使して両言語の多数のデータを収集し多面的に分析記述した本研究は、制約を伴いながらも、待遇表現に関するベンガル語・日本語の対照研究として優れた成果を提示していることは疑いの余地がない。入力や文献記載の不注意は論文の完成度を一部損ないはするが、在籍中に行った精力的な研究活動（論文2本、予稿集掲載2本、学会発表4回）を踏まえて今回提出された本論文の成績について、論文審査担当者は「合格」との評価で一致した。